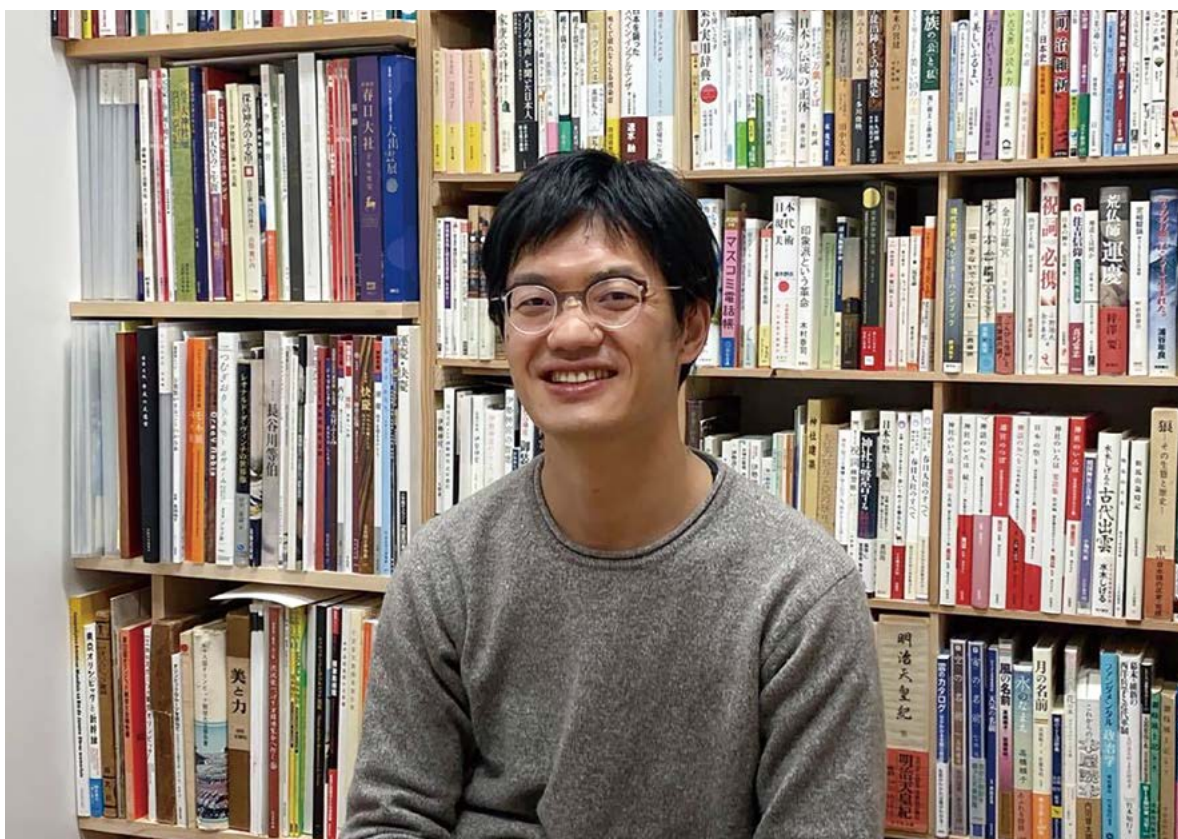


讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

# 文化通心

B U N K A T S U S H I N

2021春 No.109



## 令和の君の仕事始め

コロナ禍での給付金で「万葉社」という出版社を立ち上げた佐々木良さん。若い人たちにもっと活躍をして欲しいという強い思いを持った若き讃岐の文化人のひとりだ。地元を拠点に更に幅広い活動を目指す彼の本作りに対するこだわりは聞いていて楽しい。これからの活躍を期待したい。

- 財団月鑑
- 特別寄稿 や和らぎ たかすのパリ紀行 蓮井将宏
- 特別寄稿 易の陰陽五行とお茶 森本義人
- 財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団  
〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号  
TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212  
2021年春号 No.109 3月1日発行(季刊)





# 財団月釜

節分、立春と春めく季節の財団二月月釜・五人様茶会を、裏千家氏家宗鶴先生にご担当いただいて開催しました。

五人様茶会とは文字通り五人という少人数を客にした茶会で、元来は小間の茶事の雰囲気に近いものという趣旨で続けてきましたが、この時季のソーシャルディスタンスに叶った茶会形式になったように思います。例えば、一畳に二人座りや間隔をたっぷりとった立礼席などは、まさに少人数なればこその実現でした。

その日、お迎えしたお客さまたちに新型コロナウイルス対策の検温やアルコール消毒、マスク着用に快くご協力いただきながら、何より、露地の打ち水も柔らかく感じられる陽気に恵まれ、氏家先生をはじめ社中ご一同さまの心のこもったおもてなしで、ご参会のみなさまに楽しいひとときをお過ごしいただきました。

茶会の主題は節分にちなんでの鬼退治、さらに、鬼にコロナウィルスを重ねてコロナ退治の願いを込めた趣向の濃茶、薄茶の各席に、いにしえの鬼物語や邪気払いの話が展開して、主客ともどもお茶を楽しみました。

待合の床には裏千家十四代家元淡々斎の自画賛で、福者内の字に鬼や金棒の絵が添えられていて、幼児のように鬼は外、福は内と言った気分になり、今日の茶会の楽しさを予兆しました。

露地を通つての濃茶席、蹴り口から身をかめて入りますと、床壁に竹の九重切、乳白つばい肌が赤らんだ景色に酒を

好む狸々（能の演目）を重ねて銘・狸々と優雅に、さらに酒に酔うことから、源頼光が大江山の酒吞童子（鬼）を退治した話に敷衍し、さらに、「桃は邪気を払うと言いますから」と、枝に互生させた花を色濃くふくらませた桃を生け、節分にちなんでセツブンソウが添えてありました。

挨拶に続く話が終わって点前になりました。濃茶は回し飲みを止めて各服点でにしましたと、裏千家圓能斎が明治末頃に（俗説に大正初期のスペイン風邪流行対策と言われるが、それより前に）実施した記録の点前だと説明があつて所作が



始まりました。やがて、天端を朱塗りにして桐絵の金蒔絵を施した華やかな金閣寺（鹿苑寺）古材の炉縁（有馬頼底師の花押）の前で居ずまいを正して、幅広い肩付の博多青屋釜の蓋を取ると、広口から湯気が一気にもやい、ごく薄手の高麗茶碗（玉あられと銘付けられ、時代を経て大切に守られてきたあかしでしょう）、丁寧な華奢な金ツギが施されています（た）に湯が注がれ、手順を踏んで瀬戸焼の銘・蓬葉茶入れから一人分の抹茶が振り切られて濃茶が練り上げられました。静寂の中で湯を汲んだりこぼす音、茶杓を打つ小さな音、茶釜のかすかな音の交錯が終わり、練り加減を気遣う亭主と美味を感謝した正客の短い問答を終えて、次客以下用に、あらかじめ抹茶の入った茶碗を人数分角盆で持ち出し、盆の上で湯を注いで次々練り上げてそのまま客に

向けて出されました。本来は次客が盆を取りに行つて順次廻し取りするらしいのですが、今回は慣れぬ客の戸惑いを受けて半東が客前に盆を運びます。客が盆の中から直接、自分の茶碗を取る様は建仁寺の四ツ頭茶会スタイルみたいでおもしろかったですが、そういえば、先にいただいたお菓子・紅梅の上用饅頭も、菓子器の取り回しを避けたコロナ対策で、お通いの角盆から各自で取ったことが思い出され、ご亭主の配慮の程を痛感しました。

それぞれが自分一人のために練られた濃茶をいただきながら、全席全客のお茶を練るご苦労お疲れはいかばかりかと、また、終始、先生との阿吽の呼吸で絶妙なタイミングを計った水屋の人々に感謝の思いを深くしました。続いて、立礼の薄茶席に移りますと、

いつも閉めている障子窓が換気のため大きく開けられ、そこから暖かな陽光が燦燦と降り注いでいます。後先になります、そこでいただいたお薄茶碗に私の背中から陽光が差し込んで茶碗の球面に反射し、伏せた目にもキラキラと明るく、今まで経験したことのない豊かな気分になりました。

床には彦根藩家老職・黄石が描いた堂々とした梅の老木。ふくいくと咲いた梅花、まだまだこれからの蕾、今年の新芽が真っ直に伸びた檜梅、幾通りもの梅が揃って、墨一色の絵の中に、花の紅色や細い枝の緑色が見えるようです。

茶室は向う切り台目。財団立礼席ならではの特徴あるしつらいで、いつもは立礼卓を据えてのお点前が多いのですが、今日は嵌め込みの襖壁を取り払って現れた畳敷きの点前座で、腰掛け式の客座の視線に合わせてお茶を点てて下さいます。伊勢神宮古材（神苑の焼印）の炉縁は面取り部分を黒漆塗り、金泥で松葉を繊細に描き出しています。釜は鳳凰に桐の地紋が入った天猫・天明釜。置き合わせた朱塗りの手桶は珍しい八角の形。薄茶器には柘の絵、節分には欠かせぬ模様かと。主茶碗は玉藻焼で鉄釉の干支・牛がやわらかな色調でほのぼのとした絵に浮き立ちます。替茶碗は多彩に、般若心経を色紙書き風にしたもの、梅の絵、淡々斎の打出の小槌絵付けなどで茶が運ばれました。

ここでは亭主、点前、半東、水屋、案



内役の全てを氏家社中の方たちが担って、日頃のお稽古のほどが伺われました。最終の点心席は広間で机式の席、掛物は坐忘斎当代お家元の揮毫で「平生心是道」。脇床に奥村吉兵衛の檀紙釜敷の上に極薄の細工物・丹波焼の鬼、蓋裏にお多福の顔という愛らしさ。

やがて、丸亀・永楽亭の料理が運ばれ、鯛の雲仕立て碗、白飯に天盛した栃木県産の郷土料理で節分に撒いた残りの豆を加えたシモツカレ（最後まで鬼は外、コロナも外をあしらってか）。他にも春を思わせる具材で目にも舌にも。

帰り道、あれこれを総集した一語「今日のは楽しいうございました」と、同席の方々に今日のご縁を感謝したご挨拶で別れました。





# や和らぎ たかすの パリ紀行



着物専門店三代目店主 蓮井将宏



たかすの杜

茶席にて最初に拝見するものがお床に掛けてある軸です。軸に対して頭を下げる事から茶事が始まるという事に、私達の暮らし方を再考します。

お軸に書かれている事も大切ですが、その軸を書いた人が如何なる人生を送ったかを知ると自然と頭が下がります。今私たちに求められている事は己の軸が何なのかを問う事であり、しっかりと哲学（考え方）を基に生きてゆく事が必要かと…

心は日々、万華鏡の様に移ろいます。昨今はさらにまた、コロナによって心が漂います。そんな時程心静め軸を見出し、ぶれない自分を創り、飄々と前向き歩いていきたいですね。

一昨年の初夏、長年の夢であったパリでの個展を開催しました。その折に感じたことをまとめた「独り言」を読んでも

ただければ幸いです。去年でしたら絶対できない展示会でした。不思議な縁の会でした。出来る時にやっておく大切さを実感しました。

## 「パリ紀行」

令和元年六月念願のパリで創作着物の個展を開くことができました。

一週間程の会期を通じて感じたことをお伝えしたいと思います。

## 「パリで知りたかったこと」

月並みな表現かもしれませんが、パリはとても美しい街です。セーヌ川をはさんで両岸に美術館をはじめとする石造りの古い建物が立ち並び、今も使用されています。街並をゆっくり散策するのが楽しく、いくら歩いても不思議と疲れを感じません。これは石という素材に対する

無意識な安心感から生まれるものではないかと思いました。

そんな街で着物の展示会を催す事は永年の夢でした。パリの人々が着物という現代もつくり続けられている日本の伝統衣装に対してどのように感じるのだろうか、ひよつとして否定の気持ちがあるのではないだろうか、そんなことを実際に体感してみたかったのです。

そこで、現代において最高の職人だと思ふ人たちと一緒に創った着物をもって、パリにのり込んでみることにしました。

## 「感じ、知る」

展覧会を開くことになった会場ではお茶や香道の教室も開かれていて、パリ在住の日本人だけでなくフランス人も来て真剣に学んでいます。彼らを見ていて思ったのは、「本物を学びたいと切に願っている」ということでした。いうならば、真行草の真の部分を知りたいと願っているのです。そして中には、日本語で夏目漱石などを読んでいるフランス人もいて、本当に驚きました。こうして外国人が日本をどう捉えて、日本にどう関わろうとしているかを目の当たりにすること、日本に居るだけでは見えてこない、もしくは忘れてしまっている、日本文化のもつ価値や位置を改めて見つめ直すことができるものだと思感しました。やはりたまには日本を離れることも大事だと感じる出来事でした。



パリでの展示会風景

かつて浮世絵がジャポニズムとしてフランスからヨーロッパに広がった様に、本質的な事柄、つまり「真」は言葉を超え、国を超えるものだということも感じました。

見に来てくださった方々に、「これはどの様に創られているの?」「素材は何?」「どの様に織るの?」「いつ頃着るの?」「この紋様の意味は?」など、色々な事を聞かれました。それらの質問に対して丁寧に答えていくと、人々の着物を見る目は輝きを増します。そしてより深く部へと興味を高めてくれるのでした。

このことから、感性和理論の両方からコンタクトできてこそ、人の興味と知性を刺激し、満足を与えられるのだと教えてもらった日々でした。



## 「これでいいのだ（個性と寛容）」

パリ在住の人々にパリの良さについて聞くと、「あまり人の目を気にしないところ」、「無駄に干渉してこないところ」という答えが返ってきました。それを聞いて、特に前者の「あまり人の目を気にしない」という点が、日本人と大きく異なる点だと思いました。

自分の人生に責任をもって行動し、学生も授業料の事でデモをする国です。そうした要求の一方で、自立するためには正しい諦めも必要です。それらを含めて、いつまでも大人にならず人に頼る小人のままでは世界に伍していけないという自立した国民性は、日本人も見習うべきでしょう。小さなお店にもその店の



上：パリのブティックとカフェ 下：朝焼けのセーヌ川

オーナーの哲学が感じられ、そぞろ歩きは楽しいものでした。日本もかつて個性

ある専門店が街の彩りになっていましたが、昨今は金太郎飴のように全国同じ店が軒を並べて街の風景を作っています。我が道をゆく、つまり自分の生き方に責任を持つ。国民性にせよ、店のありようにせよ、パリの街を歩いていて、現代の日本に欠けている点はこれなのではないかと思いました。我が道をゆく人を認めて応援する。それが寛容の精神に繋がっているのですね。「これでいいのだ」と自分のことを思い、「それでいいよ」と他人のことを受け入れる。これは着物の世界にも繋がるありようだと、パリの街に置かれた着物を見て、なぜかそう思いました。

## 「人は文化の舟」

世界中の人々がお互いの文化を尊重し合う時代こそが平和をもたらします。そのためには日本人各々が日本の文化をしっかりと見直し、身につける事が求められます。まさに日本の価値が問われる時ですね。

人こそが正しく文化を伝えることができる舟です。自国の文化を身につけた私たちが世界を回る舟になれば、幸福な世の中が訪れると思います。言い換えれば、日本人が日本に目覚めて、日本人として行動することが、幸せや平和への一番の近道なのです。そしてどんな時も「和」と「ユーモア」を大切にして暮らしたいものです。

## 「物の在りよう」

パリで会った人や風景。それはもう二度とない最初で最後のものです。文字通りかけがえのない経験でした。日常で出会う人や事こそ、一期一会です。全ての有限の世界ですが、その中に無限を感じつつ生きることが日々をまっとうで尊いものにしてくれます。今回のパリの個展を通して、そんな暮らし方や日々を送る助けになるものを提案したいと、今まで以上に思うようになりました。

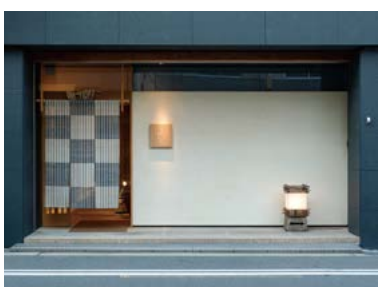
私の提案し、提供する物は、単なる物でなく、そこに使い手なりのストーリーが新たに生まれるための物にしたいと思いました。物の価値はそのストーリーの

中で創られます。このような考え方がそ日本が培ってきた美しい暮らし、美しいもてなしではなかったでしょうか。そしてそんな暮らしをこそ、外国人は見たり触れてみたいと思っているのではないかと私は考えます。決して、高価な日本美術品で飾り立てられた和の空間や、暮らしぶりを見たいと思っているわけではありません。

## 「プレゼント」

ある日、パリの夜明けをセーヌ川沿いに歩いたとき、美しい街、美しい暮らし、そして美しい人とは何かを感じました。

過去はヒストリー、未来はミステリー、現代はプレゼントと言われます。今回のパリ展で、私はたくさんの方のプレゼントをもらいました。だからこそ今この時を神様より頂いた時間とし、過去に感謝し、明るい豊かな未来を創りたいと思っています。



着物専門店 や和らぎ たかす

住所 高松市今新町1-4  
電話 087-821-6341  
<https://www.takasu.cc>



合掌

# 易の陰陽五行とお茶

森本義人



## ★八卦（小成卦「はつか」とも）の成立

「当たるも八卦、当たらずも八卦」や「八卦益」でおなじみの八卦の成立は『周易繫辭伝』に「易に太極あり、是れ兩儀を生ず。兩義四象を生ず。四象八卦を生ず。」とある。陰陽未分の太極は陰と陽の兩義に分かれる。この陰陽が、互に往来配合して、二畫の太陽、少陰、少陽、太陰の四象となる。四象の上にさらに三才の象を加え三畫の八卦とした。（図を参照太極が陰陽の二つに分かれ、更に太陽・少陰・少陽・太陰の四象となり、更に分かれて八卦となる。）

八卦は、☰「乾」（天）☷「兌」（沢）☲「離」（火）☱「震」（雷）☴「巽」（風）☵「坎」（水）☶「艮」（山）☴「坤」（地）の八種類の卦（小成卦）であり、この八卦で森羅万象を表す。

『説卦伝』によれば右に示した自然現象の外「健・説（喜び）・麗（付く）・動・入・陷・止・順」の性情や「父・母・長男・長女・中男・中女・少男・少女」などの家族の成員にも配されている。

この八卦を上下に組み合わせることで八八六十四の大成卦ができる。

『繫辭伝』に「易の書たるや广大悉く備わる。天道有り。人道有り。地道有り。三才を兼ねて之を兩にす。故に六なり。」

坤	艮	坎	巽	震	離	兌	乾
☷	☶	☵	☴	☳	☲	☱	☰
太陰	少陽	少陰	太陽	太陰	少陽	少陰	太陽
陰爻	陽爻	陰爻	陽爻	陰爻	陽爻	陰爻	陽爻

八卦 四象 兩義 太極

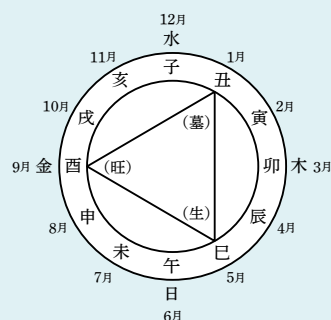
六なる者は他に非るなり。三才の道なり。」とあり、宇宙と人生の一切の道は六十四卦三百八十四爻の中に表現されており、これを説明した卦爻の辞を味わえばその妙は極まりなく、上は天地の理、神明の情より、下は修養処世の要諦にいたるまで悉く包含されているという。

## ★三合の理

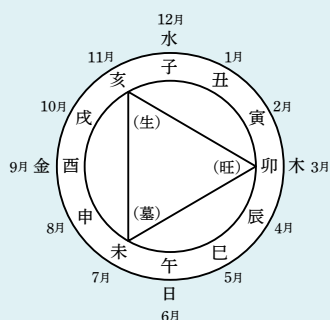
前稿では「風炉の足と五徳の爪が陰陽五行の三合の理による」と説明したが、図を示さなかつたため、理解しづらかつたとの声があつた。そこで「三合の理」を説明したい。

一つの季節にも、勢いの強弱がある。季節の始めは勢いがよく、「孟」という。中程は、最も旺盛となる時で、「仲」という。更に季節が進むと勢いも衰えていき、季節が終わる。この時期を「季」という。（この周期を、生まれる・盛んになる・死ぬ、という意味で、「生」「旺」「墓」ともいう。）これを秋の例でいえば、孟秋・仲秋（仲秋の名月でおなじみ）季秋となる。（他の春夏冬も同様）これはそれぞれの季節の盛んになる時の例だが、これを一年の周期でみると春は前の冬が準備期間であり、「大きな孟」となり、春が「大きな旺」となり、夏が「大きな季」となる。

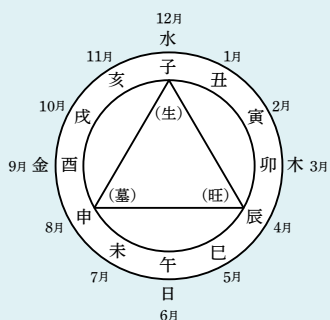
これを火の三合の例で説明すると、「寅」の二月に生じ「午」の六月に盛んになり、「戌」の十月に墓となる。以下木金水は図を参照されたし。



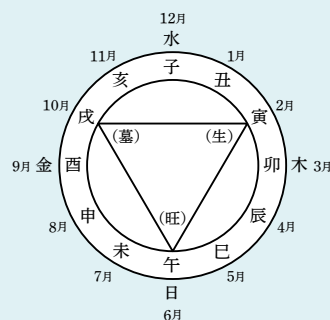
**金の三合**  
金は巳に生じ、酉に旺んに、丑に死す。三辰（支）は皆金なり。



**木の三合**  
木は亥に生じ、卯に旺んに、未に死す。三辰（支）は皆木なり。



**水の三合**  
水は子に生じ、辰に旺んに、申に死す。三辰（支）は皆水なり。



**火の三合**  
火は寅に生じ、午に旺んに、戌に死す。三辰（支）は皆火なり。

この三角形の頂点に風炉の足が来る。



## 武道か葡萄か

白鳥名物の和菓子『ぶどう餅』  
ぶどう餅って名前の商品って実は二種類あるの知ってました？

『武道餅』と『葡萄餅』

さて、白鳥名物の『ぶどう餅』はどっちなのでしょう。

名前の由来は旧国名にまでさかのぼり、香川と言えは讃岐うどんの名称で知られる「讃岐」の国、徳島と言えは阿波踊りで知られる「阿波」の国。

ぶどう餅が名物となっている白鳥町は、香川県の中でも徳島に近い東に位置する町です。

『ぶどう餅』は戦国時代、白鳥町は阿波と讃岐の境のため戦火に明け暮れた折、もち団子を串にさし戦いの必勝祈願として武士に差し出したのが、「戦力餅」として名物になったようです。その後、氏神の白鳥神社に供えられるようになり『武道餅』と呼ばれ郷土銘菓となりました。

子供の頃から色・形的に「葡萄餅」だと思っていましたが、果物の葡萄は一切使われておらず、薄紫のこの色はあずきによる色ようです。一粒は小豆のこしあんを丸め皮でくるみ、蒸しあげたひと口サイズ。1本に4個刺さっています。中身として使われている「こしあん」が舌で溶けるような餡子で、程良い甘さで風味は強すぎず、やさしい感じですね。



## お茶の風景 (11)

## さぬき早春賦

冬枯れの阿讃山脈に樹々の芽吹きが始まって稜線がやわらかくなり、讃岐平野の溜池はぬるんだ水面にきらきらと陽光を反射させ、季節が鮮やかに衣替えしていきます。

そんな早春の頃、女子の健やかな育成を願った雛まつり(上巳の節句)が華やかに愛らしく繰り広げられますが、三豊市仁尾には戦国時代の落城物語にちなんで語り継がれる風習があります。燧灘にひらけた仁尾城(現・覚城院辺り)が土佐の長宗我部軍に攻め入られて、城主の細川頼弘が戦死。時あたかもその日は三月三日とあって、以降、城下の人々は悲運の武將を悼んで雛まつりの賑わいを遠慮して、旧暦八月朔日を男

女の節句(八朔まつり)にして祝うようになったといわれています。梅が香りに満ちて咲き、路の臺が若草色の合掌をほくなど幾つもの春告げがありました。これから、萼、蒲公英、蓮華草…、木蓮、花蘇芳、桜…。春は色を重ねて深まっています。



## 財団行事予定

(3月～5月)

## 3月

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生  
3月2日(火) 午前11時・午後3時
- ◆ 書道教室 毎月第1・第3金曜日  
森本義人先生  
3月5日(金)・19日(金) 午前10時～12時
- ◆ 3月月釜 五人様茶会  
※ご好評につき満席となりました  
日時 3月7日(日)  
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)  
濃茶 裏千家 山本宗佳  
薄茶 裏千家 山本宗健  
茶席 濃茶・薄茶・点心席
- ◆ 和菓子講座  
毎月第2金曜日 高橋初乃先生  
3月12日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)  
毎月第2・第4土曜日 山下純子先生  
3月13日(土)・27日(土) 午後1時～
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日  
3月16日(火) 午前10時～午後2時(受付)  
自由なお時間にお出掛け下さい。  
ランチは要予約です。

## 4月

- ◆ 書道教室 森本義人先生  
4月2日(金)・16日(金) 午前10時～12時
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生  
4月9日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)  
山下純子先生  
4月10日(土)・24日(土) 午後1時～
- ◆ 4月月釜 五人様茶会  
一期一会を大切に、美味しい吸茶と玉露、御茶一服差し上げたいと存じます。  
日時 4月11日(日)  
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)  
濃茶 裏千家 井上宗悟  
煎茶 安部流 高橋宗初  
茶席 濃茶・煎茶・点心席  
会費 5,000円  
入席時間 ご案内(各席2時間15分を予定)  
第1席 A席・B席 9時  
第2席 A席・B席 10時30分  
第3席 A席・B席 11時15分  
第4席 A席・B席 12時45分  
第5席 A席・B席 14時15分
- ◆ 月に一度の喫茶室  
4月20日(火) 午前10時～午後2時(受付)  
自由なお時間にお出掛け下さい。  
ランチは要予約です。

## 5月

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生  
5月4日(火) 午前11時・午後3時
- ◆ 書道教室 森本義人先生  
5月7日(金)・21日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)  
山下純子先生  
5月8日(土)・22日(土) 午後1時～
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生  
5月14日(金) 午前10時～12時
- ◆ 月に一度の喫茶室  
5月18日(火) 午前10時～午後2時(受付)  
自由なお時間にお出掛け下さい。  
ランチは要予約です。
- ◆ 5月月釜 五人様茶会  
爽やかな初夏を感じる香組とお薄席。  
優雅なひと時をお楽しみください。  
日時 5月23日(日)  
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)  
薄茶 武者小路千家 佐藤守春  
香 御家流香道 香雲会  
茶席 薄茶・香・点心席  
会費 5,000円  
入席時間 4月月釜 五人様茶会と同様

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、急遽中止になる事もあります。お出掛けの前にご確認ください

表紙の言葉

新刊

## 令和万葉集

作家 佐々木良

私は執筆家として活動しています。近著でいうと『令和は瀬戸内から始まる』という香川県と元号にまつわる本を書きました。

一方で、昨年立ち上げた「株式会社万葉社」という出版社の代表をしています。この出版社を設立するにあたっては、資本金にコロナ給付金10万円をあて、文豪・菊池寛の学舎だった旧四番丁小学校を事務所として構えています。

この出版社の目的は、国内外に瀬戸内の歴史を知ってもらう「文化発信」と、いただいた給付金をできるだけ多くの額にして返納する「納税」です。文化発信と納税が一体となると、文化面でも経済面でも香川県全体が成長し、いままで以上に魅力的な土地になるのではないかと考えています。

そんな私の祖父は香川県出身の工芸家でした。幼い頃から漆器や金工品など芸術が身近にある環境で育ち、小さな頃からずっと芸術家になることを夢見ていました。

京都の美術大学に進学し油絵を専攻します。夏休みなどの長期休暇を利用して、瀬戸内の島の光景をスケッチし、それを油絵として仕上げていました。卒業後に直島福武美術館財団(現福武財団)に就職し、香川県に戻ってきました。

そこで、勤務を命じられたのは豊島です。中学校の授業で100万トン近くの産業廃棄物が不法投棄されたままの現場を訪れたことがあり、その産業廃棄物のイメージがあったので一度は豊島で働くことを拒絶しました。しかし、いざ豊島にいてみると、空気が透明に輝いていて本当に驚きました。

この間何があったのか知りたい、そして、世の中に伝えたいと6年かけて書き上げたのがデビュー作『美術館ができるまで』です。古事記の神話から美術館ができるまでの豊島のことを調べ尽くした歴史書です。

周りの人からはよく、絵の作家から執筆の作家への大転身の人生といわれますが、私の感覚としては筆の色が変わっただけで、瀬戸内の魅力を伝えようとしていることは、昔から何ひとつ変わっていないと思っています。

さて今月、万葉社の記念すべき1冊目の本『令和万葉集』が刊行されます。

令和の元号の出版となった万葉集の梅花の歌32首を一冊の本にまとめました。万葉集は、香川県に縁の深い歌集です。万葉集を読むきっかけになってもいいと思います。

暗くなりがちな社会ですが、万葉集の和歌を口ずさんでも

らえたら世の中が少し明るくなるのではないかと思っています。



## 「晴友会」更新のお知らせ

友の会「晴友会」の更新時期が参りました。更新をご希望の方は同封の郵便振替用紙にて年会費3,000円をお振込み願います。

期間 2021年4月1日～2022年3月31日

## おいでまい香川

香川県内の様々な

イベント情報を随時更新中!

<https://oidemai.kagawa.jp/>



## 編集後記

コロナウイルスの影響で大都会から地方への移住者が増えていと言いうニュースをよく聞きます。育ち盛りの子供さんを持つ若い夫婦のみならず、リタイア組も多いらしい。受け入れる側の行政も過疎や限界集落の解消を目指して、様々な取り組みで促進や応援をしています。

移住先の人たちとの交わりや地域に溶け込んで行くことは難しいし時間を要するでしょうが、それは、迎える側も同じで忍耐がいるでしょう。老弱男女を問わず、住民が増せば元気なコミュニティ活動が可能になり、地域の伝統行事の後継者も現れるかもしれません。お互いに声を掛け合い、顔の見える社会を願って、香川の文化の発信を今年も目指します。

「声・情報お寄せください」

〒760-0017

高松市番町二丁目一十二

公益財団法人 中條文化振興財団編集部

TEL (087) 826-3355

FAX (087) 826-2212

info@chujo-zaidan.or.jp